
睡蓮の庭

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡蓮の庭

【コード】

N6451H

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

昔から、私の脳裏に描かれる風景。白いベンチとブランコ、そして色とりどりの睡蓮が咲く、池。そこで私は幼なじみを思い出す。

いつの頃からか思い出の中に潜む、ひとつの風景。

暗い庭。薄暗さの中に浮かび上がる、白いベンチとブランコ。

そして、深い池と、色とりどりの睡蓮。

何処で見たのかも思い出せない。

写真だったのか、絵だったのかもさだかではない。

ふとしたはずみで、脳裏に描かれる風景だ。

そして、その風景が脳裏に浮かぶと、何故か背中に冷たいものが走るのだった。

「おじいちゃんの、十三回忌なんだから」

姉に連れられて、私は久し振りにそこを訪れた。

祖父が住んでいた、兵庫県のある場所。その山の中に土地を持つていた祖父は、一軒の別荘を建てた。

祖父は、その別荘を「保養所」と名付けていたという。

いつか年老いて、誰かに頼らなければならなくなった時の為に、兄弟で助け合う為の場所。

そんなものを、祖父は自分の子供とその子供達の為に用意していた。「子供に頼るな、兄弟で助けあえ」と言う意味なのか「親戚で、じいさんばあさんの面倒を見る」という意味なのか。

どちらでも良いのだが。

そう言えば、昔はよく子供達もここに集まったものだ。長期休暇に入ると従兄弟たちが集まる、そんな場所。

森があり、山があり、神社がある。

むかしながらの風景を、子供だった私はただただ、楽しんでた。どうして、行かなくなっただろう。学校の友達と遊ぶ事の方が楽しかったから？ 多分、そうなのだろう。

そんなわけで、私は約二十年ぶりにその場所を訪れた。

祖父たつての願いということで、交通の便の悪いその場所での十
三回忌法要。

おかげで、台所や法要が行われる居間は女達の戦場となっていた。
同行した妻も自分をアピールすべく、大奮闘。子供達は、従兄弟
だのまた従兄弟だのと遊んでいる。

じいさんの願い通り、ここは「親戚の集まる場所」になったわけ
だ。私は苦笑しながら手持ち無沙汰に家の中を散策する。

そう言えば小さかった頃もこんな風に「探検」をしていたっけ。

そうそう、姉に引きずられるように、いろんな場所で冒険をして
いた。

「あんだ、こんな所に居たの？ ちょっと、手伝ってよ」
姉の声に、振り返る。

「物置から、そろいのお皿取って来て」

「物置って？」

「ああ、こつち」

姉に促されるままに、母屋を離れる。

と、庭に出た。

私は、目を見開く。

日の当たらない、薄暗い庭。白いベンチとブランコ。

そして 睡蓮の池。

それは、私の頭の中に描かれる風景を、そのまま再現したものだ
った。

「ここ、だったんだ」

ずっと、絵だか写真だかと思っていたが、違っていた。

子供の頃にここで遊んだ記憶だったらしい。

「あら？ あなたここに来たの初めてでしょ？」

と、姉が笑う。

「あんだが最後にここに来たのは、この庭が出来る前だったんだか
ら」

そうだったのか？

「おじいちゃんがひとりでここに住むようになって、十年ぐらいかけてこの庭を作ったの」

「でも、見たことがあるんだ」

睡蓮の池。

それを見に行こうって、誘ってくれた、冒険好きな ああ、そうだ。あれは姉じゃない。

よく一緒に遊んでいた少女の顔が、不意に私の脳裏に浮かんだ。

そう、あれは従姉だ。

「タエちゃんって、居たよね？」

「え？」

姉はあからさまに驚いた顔をした。

「妙子ちゃんの事？ 覚えてるの？」

どうして忘れていたのだろう。よく、この別荘で遊んでいた筈なのに。

おさがが可愛い女の子。

私よりひとつ年上で、よく彼女の「冒険」につき合わされていた。

「少し離れた所に池があって」

「もう、ないけどね」

ぴしゃんと言いつつと、姉は忙しそうに私の手を引いて物置に連れて行った。

言われるままに皿を運びながら、私の心には蟠る何かがあった。

なんだろう。

とても気になる。

居ても立ってもいられなくなった私は、法事の準備を抜け出して、その場所を探した。だが、記憶の場所に、池はない。

地元のお婆さんを見つけ、話を聞く。

池は、埋められたそうさ。

子供が落ちて、死んだ。

でも、遺体はとうとう上がらなかったという。
ひっそりと立つお地蔵さんに、わたしはそっと手を合わせた。

庭に戻り、白いブランコに腰をかける。

あの場所にはブランコやベンチはなかった。そんなものは最初からないと、話を聞かせてくれたお婆さんも言った。

だったら、私の記憶にあるあの場面は間違いなくこの庭なのだが……。

そうだ、ブランコやベンチは最初からあった。無かったのは、池。不意に、背中を押されたような気がした。

小さな手の、感触。

ああ、そうか。そう思う。

タエちゃん。君は、ここに居たんだね。

おじいちゃんはタエちゃんの為にこの庭を作ったんだ。

遺体が見つからないままに埋められた、睡蓮の池。

死んでしまったタエちゃんの為に「秘密の冒険の場所」を、作ってくれたんだね。

小さな手が、私の背中を押す。

ブランコが揺れる。

あの日。

池に落ちたタエちゃんを、私は助けようと手を伸ばした。

私の手を掴んだタエちゃんは、ものすごい力で私の手を引っ張った。引きずり込まれる寸前に　私は、その手を振り払ったのだ。

大人を連れて戻ると、小さなサンダルが池に浮いていた。

どうして、忘れてしまっていたんだらう。

小さな手が、背を押す。

ブランコが揺れる。

そうか、君はあの時からずっと、私が戻って来るのを待っていたんだね。

お待ちせ、タエちゃん。

遊ぼう。昔みたいに、冒険しよう。

小さな手が私の背を押す。

睡蓮の花が近づいた。そして、そこから助けを求めるかのように伸べる小さな手。

私は今度こそ、その手を掴んだ。

気がつくのと、僕は寝かされていた。

どこかのおばさんが、僕を抱きしめる。

「あなた！」

そう叫んで力強く僕を抱きしめる、おばさん。

別のおばさんも、僕を見て泣いている。

「良かった。なんで池に落ちたりするのよ」

とか言っている。

違うのに。池に落ちたのはタエちゃんなのに。

そういえば、タエちゃんは何処にいったんだろう。

僕は、何かを握っている事に気がついた。

何だろうと、そちらを見る。

そこにあっただのは、小さな骨と、そしてまるで大人みたいに節ばった僕の　手。

(後書き)

別の話に煮詰まり、息抜きで書いてしまいました。

ほんのガス抜きだったのですが、折しもホラー企画中。次の日になつてひたすら後悔して大幅加筆修正しました。(苦笑)

大変、失礼致しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451h/>

睡蓮の庭

2010年10月8日15時36分発行